

日本職業教育学会
第 80 回 関東地区部会

報告集

2025 年 5 月 10 日(土)

於: オンライン

研究会プログラム

柳田 雅明

知ること(knowledge)は、
教育・訓練においてどう場合分けできるのか
—対象者と時間上視野を軸として—

P.1

知ること(knowledge)は、
教育・訓練においてどう場合分けできるのか
－対象者と時間上視野を軸として－

柳田雅明
青山学院大学

- 今回この機会は、2023年11月18日本研究会第74回に次の題目で研究着手に先立って与えていただいた機会に続くものとなる。

できるようにするだけで良いのか。知ってからできるが大事なはずである。それを前提にして、一体何をどうしようとしているのか。<https://jsstvet.org/archive/kanto/index3f.htm>

- その研究作業にもう取りかかっているにあたり、「解決のための支援を得られる場所」となさっていただきたくお願い申し上げます。
- なお、本ネット開示での赤字部分は、今回第80回研究会開催当日から改変したものとなる。また、題目において特に副題に直接かかわる部分は、ネット開示にまだなじまない内容未定な段階にあるとして、割愛させていただいている。

本質的な問い (The essential question)

教育内容においてすべての人々に権利をどう保障
するのか

(How do we develop entitlement of educational
contents for all?)

- たしかに、幼い子どもが「できた」時、その喜びは子ども本人ばかりか保護者そして教育者にとっても大きい。しかし年齢を重ねていけば、「できていればわかっていなくとも良い」では、主体である人として自身で知りわかり考えることに欠ける。それでは、与えられた状況に対応することをできるようにするだけになる。
- このような状況を克服することに資する知見を学術に裏打ちして得たいというのが、根本とする問題意識である。

次を改めてお示しする。

主体となる人として自身で「知り」「わかって」から「できる」ようにするため、何が共通して取り組まれ、その際何の性質を有する教材・施設・設備をどのように利活用しているのか。そして、その目的をかなえうるのに国・領域を超え共通する条件とは何か。

みなさまは、この問いを、どう捉えどうお考えになりますか。

- 「どのような学び手にも系統知学習機会を権利保障すること」に関する議論が、職業専門知保障に関するリーザ・ウィーラハン(Leesa Wheelahan)の2007年学術論考を端緒に盛んになっている（基本として英語によって）。そこでは、「知る」を忽せにせず、「わかる」を欠かせない土台にして「できる」ようにする実践が強調される。

- その論は、カリキュラム研究で知られる社会学者マイケル・F・D・ヤング(Michael F. D. Young)が、対象とする教育領域を拡張してさらに発展させ、職業教育・能力開発のみならず、初中等教科教育(Young and Lambert, 2014)、さらには平和教育(Pettigrew, 2018)へも広がる。
- ところが、その発想・理念とそれに基づく実践をどう学術上検討するのかに**おいて**、実証による研究がまだ見出しがたく、**それは**まさにこれからである(Deng, 2020; Hordern, 2022)。

では、知に基づくことで、教育における権利
保障が支えうるのか

(Can we underpin entitlement in education
based on knowledge?)

もし、教育（education）が、人として^の尊厳を思慮深く大切にするのであれば、次のスライドから示す考え方が可能に^するとの提起がある。

それが、次のHordern (2024)である。

それ以上に、（規準を立ててある）知が豊かな実践を包摂的かつ参加型として生み出すのを通じたのみ、知がエリート主義や時代遅れに陥らず社会の全ての者に意味を持って手に入れられる特性を、共同体が獲得できるのである。

Furthermore, it is only through generating inclusive and participative forms of (normative) knowledgeable practice that communities can acquire the characteristics that enable knowledge to become meaningful and accessible to all in society without retreating into elitism and obsolescence.

「力満ちる知」は、その探究全体のため手ががりとなる。なぜなら、**それが**本質として論理上も倫理上も取り扱いが可能であるからである。

“powerful knowledge” as a clue for the whole research, because it is treatable both essentially as logical and ethical nature.

- ここで, powerful が意味するのは, 誰にとっても「力が満ちる」である。Youngらは, 「権力ある者が持つ知 (“knowledge of the powerful”) と全く区別してむしろ対立するとして扱っている。

現時点で焦点としている研究対象取り組み

教員・指導員養成・研修

「できる」を支える「知る」が身に付くために、どう教員養成をするのか 国際比較検討（青山学院大学総合研究所 2024-26年度研究ユニット）

“How Do We Actualize ‘Knowing’ to Underlay ‘Doing?’: Interdisciplinary International Comparative Study of Initial Teacher/Trainer Training” as a project of the Research Institute, Aoyama Gakuin University, finishing by March 2027

したがって、そもそも問題意識である前掲本質的な問い「教育内容においてすべての人々に権利をどう保障するのか」は、研究資金の出所でもある上記プロジェクトの枠組みに沿って扱う必要がある。

- では、どこから切りこんでいくのか。本話題提供では、「できる」を支える「わかる」の大前提となる「知る」を切り口とする。
- そして、次スライドに示す領域と国を対象として取り組めるとして、研究作業に取りかかっている。職業大では、特に新井吾朗さんと濱田勇さんにたくさんお力をたまわっている。

	社会科 (主権者となる 市民として「知 り」「わかり」 行動することと 関連させて)	理科 (主体として人の あり方と深く結び つく宗教と性の教 育とも関連させ て)	公共職業能力開発 (働く主体である人 として「知る」 「わかる」を軸に)
イギリス	○	○	○
ドイツ語圏	○		○
日本	○	△	○

<参考> プロジェクト採択時(2024年1月)での対象とした領域と国

	社会科 (市民として「知り」「わかり」行動することと関連させて)	理科 (主体である人としてのあり方と深く結びつく宗教と性の教育とも関連させて)	公共職業能力開発 (主体として働く人として「知る」「わかる」を軸に)
イギリス	○	○	○
カナダ			○
日本	○	○	○

では、まず何から取りかかろうとするのか
(What do I aim at in the first place?)

How does “knowing” actually work well in educational practice from the point of the view of idea “powerful knowledge”?

そこで、専門領域横断となる国際調査を効果的に
するのには、どうするのか。

How do we effectively and fruitfully develop the
inrerdisciplinary and international research?

- まず、プロジェクトで用いるキーワードにおける語意統一である。
- ところで、そもそも知 (knowledge) とはなにか。
- その上で、知ること (knowledge) は、教育・訓練においてどう場合分けできるのかを整理しておくことが大事となる（ここが、今回題目とし、ご高見を頂戴したいところとなる）。
- 職業教育訓練・能力開発の分野では、**expertise(専門知識)**を **capacity for action** (Guile and Unwin, 2022) (仮拙訳「行動のための**器量**」) と**する**定義も打ち出されてもいる。

※ここよりスライド十数枚は、
「当事者研究」における方法論も含め、
内容未定のため、ネット開示を控えさせていただきます。
今機会において核心となるにもかかわらず、
このようにせざるを得ないこと
誠に恐縮である。

● 学術上の意義があると本話題提供者が考えているもの

- 検討対象が、一貫した比較研究の枠組みのもと、よりの的確に客体化できる（前出の通り、対象領域の違いに加えて国別で）
 - 学術研究としての妥当性向上（実践上有益性も含めて）
- 職業能力開発指導者養成への対象領域拡張，そしてそれがもたらす教員養成・研修さらには当事者研究一般へのフィードバック
 - 学術研究有効範囲拡張への期待（実践上相乗効果も含めて）

- 職業能力開発指導員の養成・研修は、「日本国憲法」第27条にある国民としての義務「勤労」を果たせるよう権利として保障することによって欠かせない営みでもある。そのことは、教育権に関わる教員養成の場合よりも直接、基本的人権保障へと結びつく。
- 当事者研究を行うに際して、当事者以外の利害関係者から求められる切迫度が、公共職業能力開発指導員における養成・研修の方が、障碍者や学校教員養成・研修の場合よりも、短期に見いだせうる公益が着目されるといった理由によりさらに大きくなると話題提供者・柳田は予想する。

- 既存の取り組みをいわば後付けで整理・省察するだけでなく，事前に計画して実施する展開を軸とする点においても，本研究は画期的と言える。

- では、今回参加の方々は、次の問いにどう反応なさりますか。
できたら、ご自身のお取り組みやご体験にも関わるような
形で、率直にうかがえたらありがたいです。

主体である人として自身で「知り」「わかって」から「できる」ようにするため、特に養成課程において（提供者・受講者それぞれの立場あり）、何が共通して取り組まれ、その際何の性質を有する教材・施設・設備をどのように利活用しているのか。そして、その目的をかなえうるのに国・領域を超え共通する条件とは何か。

参考文献 (その1)

※ 下線を施した執筆者は、共同研究参画を了解済みである

- Chapman, Arthur, (Ed.). (2021). *Knowing History in Schools Powerful knowledge and the powers of knowledge. Knowledge and The Curriculum*. London: UCL Press.
- Deng, Zongyi. (2020). *Knowledge, Content, Curriculum and Didaktik: Beyond Social Realism*. Abingdon: Routledge.
- Guile, David, and Lorna Unwin, (2022). “Expertise as a ‘capacity for action’: reframing vocational knowledge from the perspective of work,” *Journal of Vocational Education and Training*, Volume 74, Issue 1: Knowledge and Expertise in Vocational Education and Training. pp. 31-49.
- Guile, David, “*Rethinking knowledgeable practice in education* by Jim, Hordern, Abingdon, Routledge, 2024, 152 p.,” *Journal of Vocational Education and Training*, Volume, Published online: 10 Mar 2025.

参考文献(その2)

- González, Paulina Bravo, and Michael J. Reiss. (2021). Science teachers' views of creating and teaching Big Ideas of science education: experiences from Chile. *Research in Science & Technological Education*, 41(2), 523–543.
- 広田照幸. (2009). 『ヒューマニティーズ教育学』 岩波書店.
- Hordern, Jim. (2024). *Rethinking Knowledgeable Practice in Education*. Abingdon: Routledge.
- Hordern, Jim. (2022). “Powerful knowledge and knowledgeable practice,” *Journal of Curriculum Studies*, 54(2), pp. 196-209.
- 石原孝二 編. (2013). 『当事者研究の研究』 医学書院.
- 熊谷晋一郎. (2020). 『当事者研究：等身大の「わたし」の発見と回復』 岩波書店.
- Young, Michael [F. D.] and Lambert, David with. Carolyn Roberts and Martin Roberts. (2014). *Knowledge and the Future School: curriculum and social justice*. London: Bloomsbury Academic Press.

参考文献(その3)

- ジョン・ロックラン 監修・原著, 武田信子 監修・解説, 小田郁予 編集代表, 齋藤眞宏・佐々木弘記 編集. (2019). 『J. ロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディ』学文社.
- Mansfield, Jennifer, and John Loughran. (2018). “Framing learning through self-study: the search for pedagogical equilibrium.” *Pushing Boundaries and Crossing Borders: Self-Study as a Means for Researching Pedagogy*. Garbett, D. & Ovens, A. (eds.). 1st ed. UK: Self-Study of Teacher Education Practices (S-STEP), pp. 409-415. <Open Access>
- 向谷地生良. (2025). 『向谷地さん, 幻覚妄想ってどうやって聞いたらいいんですか?』 (シリーズ ケアをひらく), 医学書院.
- 中野和光. (2016). 「グローバル化の中の学校カリキュラムへの一視点」 『カリキュラム研究』 25, pp. 117-123.
- Pettigrew, Alice. (2018). “Why teach or learn about the Holocaust? Teaching aims and student knowledge in English secondary schools.” Andy Pearce and Arthur Chapman, eds., *Holocaust Education 25 Years on Challenges, Issues, Opportunities*. London: Routledge. <e-book>
- 志村喬, 編著. (2025). 『社会科教育からのケイパビリティ・アプローチ: ペダゴジー, 再文脈化, エージェンシー 単行本』 風間書房.

参考文献(その4)

- 志村喬 編著. (2023). 『社会科・地理教育実践学の探求: 教職大学院で教科教育を学ぶ』 風間書房.
- 志村喬. (2022). 「パワフル・ナレッジ (powerful knowledge) 論の教科教育界における受容・適用 - 社会系教科教育を中心事例にした書誌学的アプローチ」 『上越教育大学研究紀要』 41(2), pp. 379-39.
- 志村喬, 編著. (2021). 『社会科教育へのケイパビリティ・アプローチ: 知識, カリキュラム, 教員養成』 風間書房.
- 志村喬. (2018). 「イギリス教育界における「知識への転回」と教員養成 - 地理教育を中心に -」, 松田慎也監修 『社会科教科内容構成学の探求』 風間書房, pp. 212-234.
- 浦河べてるの家. (2005). 『べてるの家の「当事者研究」』 医学書院.
- Wheelahan, Leesa. (2019). "Knowledge, competence, and vocational education," *Wiley Handbook of Vocational Education and Training*. pp. 97-112.
- Wheelahan, Leesa. (2007). 'How competency-based training locks the working class out of powerful knowledge: a modified Bernsteinian analysis.' *British Journal of Sociology of Education*, 28(5), pp. 637-651.

参考文献(その5)

- 柳田雅明. (2021). 「誰にでも権利として保障される生涯教育そして生涯学習とは、何になるのか -職業に関する内容に焦点を当てて-」 『日本生涯教育学会年報』 41, pp. 231-248.
- 柳田雅明. (2015). 「「知識に基づくカリキュラム」を今日提起する意義とは -「カリキュラムの社会学者」マイケル・F・D・ヤングの近論から-」 『青山学院大学 教職研究』 1, pp.115-125.
- 柳田雅明. (2011). 「「知の循環」という観点から見る能力認証制度 -イギリスの「資格・単位枠組み」を事例に-」 『日本生涯教育学会年報』 32, pp. 217-225.
- Young, Michael [F. D.] and David Lambert, with Carolyn Roberts, and Martin Roberts. (2014). *Knowledge and the Future School: curriculum and social justice*. London: Bloomsbury Academic Press.
- Young, Michael F. D. (2008). *Bringing Knowledge Back In: From Social Constructivism to Social Realism in the Sociology of Education*. London: Routledge.

- ご清聴ありがとうございました。
- 今後の発展とそれによって可能となりうる課題解決に向け、忌憚なきご意見ご提案をよろしくお願いいたします。